

川柳の雑誌

麻生路郎 ★ 編輯
 皇島高感交

大正十三年三月三日第三種郵便物認可
 昭和十三年五月十五日發行
 第十五卷第五號(每月一、四、十五、十八日發行)



園

13年5A

172

第五號 第五十卷
 每月十五日發行

川柳雜誌社發行

料北
理京
白
蘭

典雅な日本座敷

土佐堀船町



夏の帽子

夏光る……

颯爽たる三越の夏帽子

- ◇ 四菱・變り編・支那麥帽子 .35より
- ◇ マーシャルパナマ ……2.80より
- ◇ 本パナマ ……8.80より

大 阪



高麗橋

三越

菊正宗

店商納嘉本 會社株式



社の今昔

麻生路郎

大正十三年一月十九日大阪南堀江書林俱樂部に於て川柳雜誌社の創立川柳大會を開催し、同年二月十五日、川柳の社會化、初心者指導、古句研究發表の機關誌として菊判三二頁の月刊「川柳雜誌」を創刊した。當時の柳誌は四六判型乃至小型の兎藪的刊行であつたため菊判型の「川柳雜誌」の出現は月刊斷行とは他誌の驚異的となり、柳誌改革が「川柳雜誌」によつて一歩前進の動機をつくつたことは特筆大書していいだらう。

左に、神戸ふあうす社の相元紋太氏が、昭和十一年五月に執筆された「柳界の動向」といふ一文の書き出しに、

「大正十三年一月、川柳雜誌社起つに及んで柳界の空氣は一變した。即ち月刊柳誌の十二回發行が正確に實行されて他の柳誌が續々これを看做ひ今ではこれが一般の常識とまでなつた。この事は餘り

にも莫迦氣たことではあるが、それさへ特に記さなければならぬほど従来の柳界は放漫であつたのだ。川柳雜誌は總ての施設をぐんぐんと實行した。その頃全然趣味的範圍を出來なかつた柳界は、隨つて豆本式柳誌の全盛時代であつた。近頃のこれは又驚くべき菊版氾濫を見ては今昔の感がある。現在の「きやり」「番傘」「京」その他の前身はどうであつたか。川柳雜誌社の興へた刺戟によることは否めない。」云々

二

「川柳雜誌」創刊當時の同人は柳路、風人、史風、二柳子（現在の綠雨）、松雨（故人）、啞人、一聲（後の朝陽）、徹底郎（故人）、かほる、古城山、蘆穂、露太樓、夜調、佳扇、洲馬（故人）、剛山、助六、飛水、零骨（故人）、一洲、光太樓、輝翠、耕鹽、雅幽の二十四名であり、本社の所在地は主幹路郎の當時の宅、兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地に置き十支部を擁し堂々たる陣容を形成して今日の礎石を築づいたのである。

三

次いで百數十名の同人、社友等の去來があり、三十有餘の支部が設置さるゝに至つたが、一昨年の夏七月同人會の決議によつて、従来の同人組織を解消し社は路郎個人の經營となし、路郎門の人々は新に不朽洞會を結成して、「川柳雜誌」の支持に當るこころになつた。現在不朽洞會

員としては

綠雨、かほる、山雨樓、艸樂、里十九、丹路、柳路、悟郎、鮎美、新水、夕鐘、夢裡、没食子、水車、變人、八歩、豆秋、紀太、小柳子、いわを、青兒、白峰、民郎、おさむ、史風、みつる、勇、ライト、古弗、水客、紫香、潮花、形水、並木

四

等三十四名である。

十五ヶ年間を通して特筆社史を飾るに足る催物は百號記念に朝日會館で一千有餘の聴衆（有料）を蒐めた「川柳の夕」の開催であり、十周年記念の東京會であり、大朝、大毎、動物園其他の大會場に於ける多種多彩の川柳大會で牧擧に逞がない。

五

川柳の社會化を提唱した社だ

家究研の其と「究研川玉武」



翁 屋 農 秋 本 梅

本誌所載の「武玉川研究」が柳壇はもとより國文學史上から見ても不滅の金字塔であることは今更らしく云ふ必要があるまい。それにつけても梅本、森、蛭子、三氏の偉大なる功績に對しては川柳人擧つて感謝すべきだと思ふ。

「武玉川初篇研究」は本誌

けに「一路集」の選者の顔ぶれが各方面にわたつてゐるのも面白いではないか。

劍花坊（故人）、水府、啞人、蘆穂、五葉（故人）、溪花坊、松窓、久流美（現在の久留美）、古城山、露太樓、きん坊（故人）、紋太、久良伎、寛汀、春雨、洲馬（故人）、花童子（現在の晨修）、東魚、夜叉郎（故人）、省二、維想樓、館三坊（故人）、松郎、一閑子、二柳子（現在の綠雨）、輝翠、雅幽、柳路、壽明、美の作（故人）、霞乃、馬行、一聲（後の朝陽）、松雨（故人）、かほる、刀三、史風、雀郎、右大臣（後の冷刀）（故人）、番翁、東洋鬼、萬よし、飯山、鯛坊（現在の周魚）、夢遊、兎糸子、三福、春三、ひろし、町二、眠聲（現在の方眠）、眼隠子、三笑、銀砂子、琴人、素人、毒仙、花菱、悟郎、多聞、濁水、駒人、光路、双葉子、綠之助、亂耽、二南、鮎美、貴山、舟々、

新水、石竹、杏三、雨町、晃卓、閑生、三太郎、柳秀、一徹、雨迷、汀柳、鉄洲、五健、艸樂、鶴峯、華水、豆秋、明珠、一杉、翠夢、水車、錦水、天痴人、山月、機見女、春秋、夕鐘、司郎、没食子、里十九、丹路、開路、柳路、雞牛子、不浪人、珍竹林、可宵、啞三味、大樓、夢裡、變人、民郎、白峰、榮、路郎

六

一路集の選者は個人選三共選に別れてゐるが近年は個人選だけにした。もつとも一路集の共選は二人の選者が同一の句を個々に選して發表したものである。



氏 魚 東 森



氏 二 省 浜

の第九卷第六號（昭和七年六月一日發行）から掲載し、第拾壹卷、第三號で初篇の研究を終了、第拾壹卷、第五號（昭和九年五月一日發行）から「武玉川二篇研究」の發表となり、第拾四卷第一號（昭和十二年一月十五日發行）から「武玉川三篇研究」が發表されて今日に及んでゐる。尤も三篇研究の全部が既に編輯局の机上にあることはまことに心強い次第である。期を見てこれを單行本とな

×

年齢は、わざと發表しないが、寫眞から想像されたい。秋農屋翁のは近影、省二氏のは白髪を氣にされてゐるので數年前のお目にかける。東魚氏のは最近本社寫眞班で撮影したものの。終りに三氏の健康を祈る。

し柳壇の永遠にそなへたいと思つてゐる。

×

梅本秋農 屋、森東魚

「武玉川研究」に就いて

柳壇の至寶「武玉川研究」を本誌に掲載しはじめたのは單なる興味本位や人氣政策からではない。古典研究に對する私の信念を、梅本、森、蛭子三權威の力を藉りて實現せうと志してゐるに過ぎない。私は曾て森氏にこんなことを話した。この武玉川研究は君達三人の仕事ではない。私もその一人だと言つたことがあつた。そして森氏も私の意のあるところを知つて大いにうなづいてくれた。私は現下の柳界に對して是非しなければならぬ多くの仕事を持つてゐるので、この仕事に直接参加こそしないが、私自身も参加してゐる氣持ちで、掲載の勞を採つてゐるのである。従つて私はこの研究に對してはどんな犠牲を拂つても完成させたいといふ希望を抱いてゐるのである。

この際、その點についていささか自分の意見といふよりも寧ろ覺悟を述べて置きたい。

武玉川研究は梅本秋農屋、森東魚、蛭子省二の三氏の不斷の努力によつて既に三篇まで研究され遂に本誌上に發表されつゝあるのであるが、昭和七年六月から滿六ヶ年間に費やして僅に三篇研究の發表をなした、ある現状から類推するならば、全十八篇の研究發表に要する歳月は今後なほ三十ヶ年以上なるであらう。今後、發表量を増加するにしてもおそらく二十數年は要するであらう。

こゝで考へられるのは、三氏の天壽を如何に長かれ祈つても、揃つて二十幾年の健康を保持されることは至難ではないかといふそかにおされてゐる。

萬一の場合を想像することは失禮ではあるが、萬々一そんな場合が生じた時には更に補缺參加の研究家の手によつても武玉川十八篇の研究完成はしたいと思

つてゐるのである。そうすることがおそらく三氏の從來の努力に酬ゆる唯一の方法ではないかと思つてゐる。

かくいふ私自身も亦、武玉川研究完成のよろこびに會ふことは不可能であるから、萬一の場合には「川柳雜誌」の繼承者によつて、これが完成を爲すやう申し傳へるつもりである。

このリレー式武玉川研究の完成が後人を裨益することを想像して、掲載を続けるであらうことを約束するものである。三氏又小生の意のあるところを諒して更に第四篇の研究を切望する。(路郎生)

「川柳雜誌」の表紙や挿畫を描いた人たちを調べて見たら、いろんな人たちが煩はしてゐるのに今

一川柳雜誌の表紙や挿畫を描いた人たちを調べて見たら、いろんな人たちが煩はしてゐるのに今

錢漫畫を描いてゐた人も交じつてゐるし、全然畫家でない人達もある。名前を見てゐるだけでも興が湧く。次に芳名を掲げて謝意を表する。

柴谷榮舟氏、吉田きよし氏(故人)、小出橋重氏(故人)、加藤靜見氏、伊藤觀魚氏、吉岡鳥平氏(故人)、牧野寅雄氏、田村孝之介氏、岡本一平氏、清水對岳坊氏、岩本素人氏、森田ひさし氏、湯川左右氏、富田英三氏、大西長三郎氏、梅田呑吸氏、麻生アト、麻生リリ、小寺鳩



一路集

禁煙

禁煙のそれから甘い物が好き 春菓
禁煙のわけを女給に打明けける 同
禁煙は口のさみしい晝さがり 曉香
非常時は禁煙ちかふ氣にもなり 同
禁煙へ隣り座席のいゝ香り 鴨路
禁煙へ歸朝土産の葉巻さか 同
禁煙のけふマツチまで遠ざける 良短
張り切つて禁煙十日程つゞき 伊佐緒
月末は禁煙黨になるつもり 無煙
禁煙が不思議につゞく値上から 並木
禁煙に一本位さす、められ 美知夫
落籍されて煙草をやめる中年増 水
禁煙へ手持無沙汰な朝が来る し
止したのも知らず紫煙を遠慮なく 不水



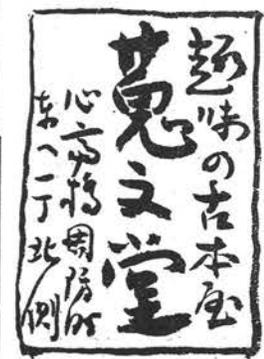
家書と「誌雜柳川」

禁煙を男一匹押し切れず 同
長男が生れ煙草をやめにする 潮花
禁煙の重役氣が抜けた話ぶり 流葉
禁煙へ女給一本呉れさ言ひ 白外郎
禁煙の火鉢へかざす手のでかさ 水客
禁煙のキザミ一服だけ叛く 春月
禁煙に車窓の山は青々 同
禁煙のふみボケツトに糞の粉 同
献金は煙草に未練ない男 文庫
禁煙は友が戦死のその日より 市他樓
禁煙が一番先に腰を上げ 風葉
禁煙へ正午の休み長すぎる 曉童
禁煙の鼻先を行く洋煙草 由布
禁煙のステッキ廻す散步道 葉光
禁煙をせよさ長生するつもり 四一
腕を組むくせは煙草をやめてから 謙南坊
禁煙のいやしき口さなりにけり 謙南坊
禁煙をすすめるに肥えた事も言ひ 謙南坊
禁煙をすすめるに肥えた事も言ひ 謙南坊

禁煙をすすめるに肥えた事も言ひ 謙南坊
禁煙をすすめるに肥えた事も言ひ 謙南坊
禁煙をすすめるに肥えた事も言ひ 謙南坊
禁煙をすすめるに肥えた事も言ひ 謙南坊
禁煙をすすめるに肥えた事も言ひ 謙南坊
禁煙をすすめるに肥えた事も言ひ 謙南坊
禁煙をすすめるに肥えた事も言ひ 謙南坊
禁煙をすすめるに肥えた事も言ひ 謙南坊
禁煙をすすめるに肥えた事も言ひ 謙南坊
禁煙をすすめるに肥えた事も言ひ 謙南坊

父

父 謙南坊
父 謙南坊



甫氏、橋本榮助氏、橋本木象氏
三好計加氏、食滿南北氏、宮尾
しげを氏、前田五健氏、小川武
氏、富本憲吉氏、朝賀大鱗氏、
北みきを氏、樋口ヒロム氏、と
麻生路郎。



武玉川三編研究 (十七)

梅 本 秋 の 屋
森 東 魚
蛭 子 省 二

(254) はらを立てとき黒髪は殖て見へ

省 二 男子ならば、怒髪天を衝いたりする。嫉妬の焰に燃えてゐる女性に於ては「黒髪が殖て」みゆる。相貌の變化はある。みつけどころだ。

東 魚 髪はどい處を捉へた句、うがち味はある。

秋の屋 怒髪逆衝といふ語もあるが、そのやうな場合を詠んだものであらう。

(255) 孕器用も尻知らすなり

省 二 子福者の東魚さんに、御體験に即した告白を願はう。一子も無き私などは面目なし。「尻知らすなり」は頗る皮肉に出たものだ。

東 魚 「孕器用」といふ文字は面白い。「尻知らすなり」は、誠にはや苦笑の至りである。私等などに至つては、「孕器用も災難の中」とでも申し度い。呵々。

秋の屋 子供を多く産んで、よく世話をしない女を、渾名して鷲といふ。下等社會に其例が尠くない。

(256) 夜はほのくくと古市の文

省 二 お伊勢詣に疵がついた證據の、古市の文を讀みつゝ、頤を撫て居る。

東 魚 何だか芝居の「伊勢音頭」のやうな氣がされる。或は單に、古市からの文、女の文をよむ一夜のほのくく明けるといふのに「古市」を對照的に配した技巧とみるべきか。

秋の屋 旅人が古市の妓樓に遊ぶと、その翌朝遊女から旅人の宿へ、文を送つたといふ事が、馬琴の蕪旅漫録に記してある。

(257) 雨の祈の光る山ふし

省 二 雨乞祈禱の物凄く荒々しき、山伏の體からは光が放つて居るかにみゆる程だ。今や豪雨驟らむとす。

東 魚 雨を祈りをさせて、ゑらさが光るが如く感ぜらるゝ。(山伏の出立のきらきら光るのにも云ひ掛けて)

秋の屋 刺高の珠敷を挿挿んで、一生懸命に祈る態と想はれる。

(258) 大造に可愛がられて長恨歌

省 二 長恨歌は自樂天作にして、唐玄宗が楊貴妃を失つた悲歎をうつたもの、我國にても愛誦せられ、謡曲琴曲等に、その大意が傳はる。「大造」は大層なり。

東 魚 長恨歌の昔の出來事に髪髻とした成り行きになつたと云ふ意かと思ふ。

秋の屋 楊貴妃が可愛がられたといふ意か長恨歌は玄宗帝の情緒纏綿たるさまを、長篇の詩に作られたもので、可愛がられた事のみを歌つたのではない。

(259) 呼屋の婆々のうかくと老

省 二 呼屋は新町(大阪)遊廓外の遊廓の事。日々うかれて、うかくと暮して居るうちに、年老つてしまつた。派手な商賣文けに却て一層淋しい感がある。

東 魚 呼屋は前にも一度出た筈だと思ふ。但該集覽は置屋、傾城屋と書いてあり、俳諧辭典は遊廓の茶屋と書いてあつて、聊か意味合ひが違ふが、大坂詞である事は、兩書一

致してゐる。

秋の屋 良家の老婆よりも、一層哀れさが増すのであらう。

省 二 喜田川季莊云。呼屋、よびやと訓ず京坂に在之、江戸には昔より此名を聞ず。呼屋は京坂ともに鹿子位の遊女を迎へるの小樓を云也、藝子も迎ふる也、太夫及び天神を迎ふること能はず、暫間は揚屋茶屋呼屋とも迎之也。大阪今世新町の呼屋の戸數凡二百四十餘家。因に云非官許の樓をも茶屋と云又小樓を呼屋とも云也。

(260) 先達の棒を集めて宿を取

省 二 金剛杵から工夫された金剛杖は、尤も大切に取扱はねばならぬ。又先達が棒を集める事により、人員を調べ得て宿につく。

四國遍路などにも心ある者は、宿につくと先づ第一に、金剛杖を奇麗に洗ふのだ。此杖を力に遍路するのであるから。

東 魚 先達まめく敷世話をやくさまが思はれる。

秋の屋 富士登山の道者と思はれる。

(261) どつかりと寄る牢人のとし

省 二 浪人や隠居になると、一時に年を老つてしまふもの、責任を背負ふて活動するのが、年寄らぬ法である。扶持から放れる事は心淋しくもあらう。

東 魚 責任のなくなつた事もあらうが、一層生活苦に襲はれて、一度に年が寄る思ひが深いであらう。

秋の屋 年老いて遽に失職した、サラリーマンなども、猶且この浪人のやうであらう。

(262) 道具廓ほと頃日の髪かたち

東 魚 年頃になつて、色々髪など飾り立てるのを、道具店程と揶揄したのであらう。
秋の屋 瑠璃の櫛笄、銀の簪などを、頭上に挿し翳した様は、道具店とも見えるに相違ない。

省 二 辨慶の七ツ道具程などいふ。

(263) 寡のおもひ念佛で消す

東 魚 やもめの淋しい思ひを、念佛にまぎらすと云ふのであらう。

秋の屋 夫れも空念佛に終らねばよいが、まだ年若の寡婦であつては、何日續くか疑問である。

省 二 慰安には、念佛は有り難いものだが

(264) らうそくに力くらへの排縮緬

東 魚 排縮緬の襦袢の袖などを、艶めかしく見せて、蠟燭の芯をきる場合を、「力くらべ」と興じてみたのだらう。京の舞妓などが思はれる。

秋の屋 私には「力くらべ」がどうも解し難い。或は妓樓の張見世で、排縮緬の小袖をきた新造が、燭台の蠟燭と相對して、何時までも坐つてゐる、と云ふのでは無いかと思ふ。新造は多く排縮緬の小袖を着てゐた。

省 二 二 二 解を承はつても「力くらべ」

が満足出来ぬ。卑見はあれど記す迄に到らず
東 魚 私解は、たをやかな者に對して曲くつた云ひ方が面白いやうに考へたが、尙次の如く考へられるかもしれぬ。蠟燭をまばゆい計りにつけて、例へば抱き蠟燭などして、豪奢な趣きを女が競ふと云ふ意。今で云へば百燭の部屋で賑かに居る座敷と、ケチな十六燭の室で、はかない遊びをして居る對手の女といふ風に女達が已等の全盛振りを争ふて云ふ意にとれるかも知れないが、私の前説の方が味ひが深いと思ふ。

(265) 焙煉賣のだます村雨

東 魚 焙煉賣が、先づこんな工合ですと豆など入れてがさ／＼掻き廻はして見せでもするのを、恰も村雨がきたやうな音に傍の者が、だまされると云ふのであらう。

秋の屋 前解の如くであらう。

省 二 放送局のドラマ用の句だ。——私は幸序に鶉衣の焙煉賣を一讀して置いた。

(266) 病人が看病人を連れて逃げ

東 魚 病人と看病人が、懇ろになる例は随分ある。家の手前世間の手前、手に手を取つて逃げ出すので、先づ御全快御目出度い事だ。

秋の屋 現今でも患者と看護婦とが出来合つて、新聞種を詩く例が往々ある。

省 二 看病は親兄妹がせぬ方がよい、他人を雇へといふが、此句の如き事件を惹起する恐れが附随する。跡始末が一ト騒ぎ「惚て報る看病の恩」(武十七)

(267) 石の様な名ぬし派が利く

秋の屋 石のやうに頑固で、融通の利かぬ名主は、配下の者には酷薄でも、領主に對しては、却つて派が利くのである。

東 魚 頑固だが公平無私なのであらう。爲に一村に派振りがよいのであると思ふ。

省 二 二 上に對してか、下に對してかの二説に別れたが、昔は下に對しては、凡そ派振りは好かつたものと見做し得よう。故に特に石の様なるとあるから、上に對してと解したのであるが如何。

(268) 借筆に言譯くらき戀の山

秋の屋 「借筆」とは、代書のこと歟。それとも筆を借りて艶書を認めるの歟。多分は後者であらうが、「山」の字が贅疣である。

東 魚 踏み迷ふと云ふやうな心持ちなり句の姿の上で「山」の字を措いたので、とが

むべきでもないと思ふ。借筆の文字は、他に例を知らぬので明言しがたい。只讀んで字の如くなのであらうか。

省 二 前に「戀衣」の句があり、この句「くらき」に對し「戀の山」とあるなど、俳諧手法であつて、川柳式でない。「かり筆は恨と怖く言にくし」(武十八)

(269) 子實に喰立られて歌まくら

秋の屋 昔の貧乏公家衆などが、子供が多く居て生活に困難なので、歌枕すなはち名所見物と稱して、旅行でもするの歟。

東 魚 歌に生命を打込んでゐる人物、子澤山の中にゐたのでは、オチ／＼、歌を作る気分にもなれないので、旅へ逃避して、しみ／＼秀作を得やうと云ふのであらう。

省 二 子澤山で貧乏してゐては、家に在つて好い歌も出来ぬ。旅に出るに限るであらう。——尙ほ「喰立てる」が「喰潰す」か「せき立てる」か決定すれば句意は判明する。
秋の屋 「喰ひ立てる」とは一家内に多くの人が集まり、三度の食を喰ふことで、現今で

もこの語は東京で使用される。

東 魚 私も「せき立てる」意に解して前記の解をしたのではない。「喰ひ立てられる」は人数の多い生活苦の渦中に在つては、歌もよめぬからと云ふ意味合ひでの解である事を追記する。

(270) 鳥の子一ト雨つゝに羽の光り

省 二 濡羽色のよさだ。それが鳥の子であつて興味上助かる作。

秋の屋 一雨毎に鴉の子が生長して、翼の色をますと云ふのであらう。

東 魚 鳥の子が段々大きくなり、羽根も色つやを増してくる。それは恰も、一雨毎に陽氣がよくなり、草木が生長してくると同じ調子で、と云ふのである。事實濡れて色を増す鳥の子を、目のあたり見てゐる心持ちと見てもよろしい。

武玉川 (前號) 正誤
頁 段 行 誤 正
一一 一六 歳はじけ 才はじけ
三二 一〇 賣店賣 居



のた
めに

妊娠としての大切な責任
はカルシウムを補給し
て諸病を防ぎ、子宮の収
縮を容易ならしめ「安産」
へ導くことにあります。

片瀬醫學博士 推 奨
片瀬醫學博士 監 査



片瀬醫學博士述
「安産のために」冊子呈上

カルシウム錠

大阪道修町和田卯助商店



樽柳作近

選郎路生麻



非常時に古市拔きのプラン立て 大塚柳 大門
 蝙蝠と一緒に女給御出勤 同
 署で逢へば縣人會の聲でなし 同
 躑躅眼にしんみりうつる四十過ぎ 同
 破産した店も矢ッ張り水を打ち 同
 組見の方へ感謝の見得を切り 同
 甘黨の遅い歸りは案じられ 同
 死亡廣告に世間は思ひ出し 同
 塚の中ミわかつた金魚弱り出し 同
 退社する日の他人がましき 神戸楊井二南
 黒眼鏡闘志を云へば限りなし 同
 肩書のある同窓を利用する 同
 少年の怒り五體が打ち震ひ 同
 看護婦の若さが肩を組んで撮り 同
 棄て賣りの歪んだ顔ミアセチリン 同
 へつらひのマツチ素早い音で摺り 同

本棚の自費出版は読んでなし 同
 賽夷の音で満足して歸り 同
 猫捨てて女中はほつこした氣持 廣島大森千代香
 片想ひ玄關の下駄見て歸り 同
 濃化粧ほんみの年をさゝやかれ 同
 こつそりこ逃けて紋付茶漬にし 同
 すらりつミ柳よセルよい、女 同
 夫にも見せて漫書を笑ふなり 同
 急停車無事な自轉車さなりつけ 大阪山川富士
 つばくろに留守をたのんだ農繁期 同
 明日起きる事にして呑む玉子酒 同
 母親は息子の嘘に智慧をかし 同
 紙芝居来てまます事が留守さなり 同
 湯の町は坂を下りたり上つたり 同
 無縁墓道行く人も手を合せ 同
 少し字を書けば帳場へ座らされ 同
 なづけ親椿の落ちたやうに死に 同
 開店の廣告電話架設中 長野縣林 幹
 醫者もよし辯護士もよし親迷ひ 同
 満洲へ行ける次男は美やまれ 同
 一條の紫煙に王者めく書齋 同
 大阪の虹は煙の絲をたれ 大阪富本無煙

別館へ三段跳で行く時雨 同
 妻もあらう小供もあるに曳かれ行く 同
 半日の仕事に目立する木挽 同
 責任額花も青葉もありません 京都明石柳次
 金持つて死ねるものかミついで呉れ 同
 大津紅葉館にて
 手洗の下に琵琶湖の水光り 下關多田市他樓
 二對二で出勤をする共稼ぎ 同
 食ふだけの心配はない置炬燵 同
 着飾つた娘へ心配な連れがあり 同
 北京料理ミ塗り替へてから春を待ち 大阪岩橋双虎
 横斷路春のスカート風を切り 同
 奥さんミ呼ばせて見たい娘を連れて 同
 お家はんの湯治の旅費をけなるがり 同
 未練さが憎まれ口に出てしまひ 同
 相談をしますミ女隙がなし 同
 圓タクにのりばが出来て長期戦 大阪上山よしみ
 公休日今日はサービスされる身だ 同
 青雲の夢ははかなく靴みがき 同
 出征か遠いゑにしのあの人も 大阪石田沐天
 嫁ごりへ藝者の姉が云ひ聞かせ 同
 はなやかな過去はつけ衿から流れ 同
 目明の最初の十手空を打ち 高松石手河鹿
 ワイシャツが風をはらんで盜學し 同
 正夢よ今日はさうく口喧嘩 同
 挨拶が下手で大きく生れて來 兵庫縣酒井美知夫
 朝のバス皆んな働く口があり 同
 自轉車の無い子が尻を押してやり 同
 春を出る女アイロンかけ直し 愛媛縣酒井肱水
 晴れてよし雨も亦よし春の庭 同
 意地張つてした禁煙の二三日 同
 馬方も荷馬も初夏の歩調なり 名古屋平田素天
 高架線屋根屋根の海を行く 同



見そこなふ所だつたに髭を褒め
 新緑に脳病院の屋根眞赤 兵庫縣 田邊由布
 犬までも大家に云つた吠えつ振り
 若草の露にふれてる處女の指
 小僧さん電車に負けぬ氣のベタル 大阪 富岡巨人
 新調の靴の鳴る音楽しめり
 母を京へ案内して
 清水の舞台へ母は後ささり 同
 洋装もする妻がゐるハイキング 京都 緒智 愛
 ほろ酔へば歸りたくない石だたみ 同
 目高追ふ兒の背で麥の穂がゆれる 同
 取巻をつれて永持ちせぬ身上 名古屋 鈴木可香
 兵隊の列車へ野良も帽子振る 同
 大阪へ行けばス・フにも羽根が生え 同
 子を連れて程よく酒は切り上げる 大阪 米谷松太樓

伊勢神宮参拜 一句
 こゝからは襟を正した大鳥居 同
 張りつめた心もゆるむ發車ベル 同
 御秘藏はけむたがられるのに惱み 小石川縣 勝山しとし
 尺八の瞑想音こなつて出る 同
 籠ミ籠並んで鳥のままならず 同
 値切られて奥の主人が呼出され 大阪 和久双葉
 空いた腹父の歸りを待たされる 同
 表までチップの聲は付いて来る 同
 息子今父の寫眞ミ 同い年 今治 石手向上庵
 大掃除道具を越えて巡查来る 同
 油さしボコ／＼ボコミさし終り 同
 群青の空サーカスのラツバ鳴る 尼崎 酒井斗風
 死水は長男ミ 決め母達者 同
 美容院の窓が明るい五月の陽 同
 子福者ミ云はれて生活に惱まされ 大阪 松枝静波
 銃後／＼家の世帯も戦場だ 同
 洋傘の雫の先で金ミ書き 同

繁榮の策に温泉欲しがられ 大磯縣 米澤曉明
 萬歳の叫び日本人のもの 同
 エキストラ水へ飛び込む丈の役 同
 母さんだけに居所知らず苦學生 大阪 片山鏡水
 交叉點先へ立つのが制せられ 同
 待つ醫師にかほそき腕は脈搏ちて 松本 小宮山雅登
 溜息が空を仰いだだけのこと 同
 櫻花惰眠の徒等に折られるな 大阪 大西伊佐緒
 あの人も護國の鬼なる人か 同
 鯉のほりぐにやり／＼地へ泳ぎ 朝鮮 竹下 慕
 應召兵の父母はお辭儀に疲れたり 同
 千人針渡す掌 からも汗 大阪府 宮岡公子
 支那の土踏んで来るよ春を征く 同
 旅の疲れ娘も話相手なり 朝鮮 弘津慶一
 モーニングが欲しい月給になりました 同
 鞍替の女夜汽車に寒うゐる 竹島縣 黒本芳泉
 娘見に来たなと思ふ茶をすゝめ 同
 乃木ミなれ東郷ミなれ初轍 松江 白石紫薇花
 霞むでる内は禿山繪にもなり 同
 友は征く日本の聲に送られて 西宮 阿萬万的
 千に一つの一等の品宣傳し 同
 ふりかへる眼へ葉櫻の二三丁 大阪 池田悠起
 世にすねて男心を冷たく見 同
 列にする團體ホームに抄らす 長野縣 高峰 柳兒
 花嫁を連れて移民を派手にする 須坂 同
 あの人ミ會へる今宵の濃化粧 竹島縣 谷本一二美
 産聲高く九千萬の數に入る 同
 凱旋の便り妻子へのびる麥 岐阜 加藤千久良
 出来過ぎた女笑顔へ押し隠し 同
 中學へ長男 次男 又控へ 長野縣 織井公司
 母に子をたのみみつちり共稼ぎ 同
 日給の帽子アミダに歸る道 大阪 澤田粒子
 それやすまんだけですませる君ミ僕 同
 考へて考へて凡夫のあさまし 尼崎 吉兼双二

心境の變化皆勤賞になり 同
 ドロンゲームミミ母校は勝つてゐる 廣島 福岡葉留路
 硝子切春中の寒い音を立て 同
 損をした顔ミ思へぬ世辭を言ひ 大阪 田中風葉
 夕飯の子は泥の手で戻つて來 同
 入換への貨車踏切りへ世辭を云ひ 下關 櫻川 不水
 水差しに若葉が揺れる午さがり 同
 花の留守ラヂオの端唄きく枕 大阪 山本葉光
 酔ふ間を母にあたへぬ地下鐵 同
 引受けの他人の印を買うてくる 布施 福井尺琴
 さう云ふならミ母親は弱く出る 同
 一人走れば皆走る朝の驛 尼崎 北川 春巢
 歌唄はせて見たい車掌さんの聲 同
 海水着の後を残して湯へひたり 大阪 今井美鳥
 遊覽船又安治川へ波を立て 同
 かつら下日傘かして舞ふ手振り 同
 若夫婦今朝もネクタイ結び合ひ 同
 でて虫のあてごころなきハイキング 長野縣 佐二木千隈
 此の瀧を今見えますミ 便り書く 大阪 野本なほみ
 張切つた山びこを聞く春の山 同
 觀衆にもまれ／＼た春日和 同
 悪役が板についててにくまれる 今治 田窪良矩
 餌を拾ふ鳩の邪魔せぬ道をさり 大阪 矢杉雪春
 一年生嫌な先生も一人出來 尼崎 飯尾寄典史
 折カバン中は辨當ミは云はず 大阪 宮口翠花
 末の娘の手が雛壇の桃へ來る 同
 夜の汽車故郷を聞き合ふ連れが出來 同
 値切られる事に馴れてる夜店の灯 竹島縣 堀毛龜次郎
 應召のあがりしさを眼にのこし 大阪 綿 小百合
 掛金の満期次のを勧められ 同
 ラヂオも時事解説になつてゐる 大阪 森本 秋子
 夢であれミ願ふ日のあり我が暮し 竹島縣 西野 旅人
 惡酔の友ミ西陽の驛にゐる 大阪 野本 吞水
 大男バスの天井を肩で押し 尼崎 天羽 鴨路
 何事も信じあつてゐる時が無事 大阪 竹内美津枝

創刊十五周年記念

懸賞川柳を募る

創刊十五周年を自祝する意味で、懸賞川柳を募集することにしました。奮つて応募されんことを切望する。

課題 洋装 (婦人の洋装に限る)

選者 麻生路郎先生

賞 天金拾圓 (一名)

地金五圓 (一名)

人金參圓 (一名)

五客、十秀 (記念品呈上)

副賞 白ビツケ地 仮縫付別誂仕立 婦人背廣 一着

フジックノイエブルー密織

・なほ右の副賞は大阪市南區心齋橋一丁目四四の同店ウキンドーのマネキンに着せて五月廿五日より六月五日迄陳列されてある。御覧を乞ふ。

・副賞は路郎先生と選の天地人五客十秀中より更にブルー主人が洋装の立場から秀吟一句を推すことにした。

・天位必ずしも彼女への贈物が當選するに限らないところに興味がつかれてゐる。二重の當選をかち得る幸運の作家は果して誰? ? ?

・剽窃焼直しには賞金を呈しないこととした。

用紙ご句數 川・雜投句箋又は官製ハガキ一枚一句

(但一人にて幾枚投ずるも可)

締切 昭和十三年六月三十日限

發表 昭和十三年八月特輯號誌上

大阪市西區筑前橋電停前 昭和ビル二〇一號室

川柳雜誌事務所

十五周年記念懸賞川柳係宛

川柳雜誌 六月例会

乞鉛筆持參

★はつ夏の寺の夜は静かだ。作句三昧の幸福を共にするた
め定刻までに詰めかけられた。そして私等のこのよろこ
びを領つたために柳友を誘ひ合はす事を忘れないやうに。

六月九日(木)夜七時
大阪市電清水町停留所北ノ辻西入

誓得寺 (電話南四八八六番)

古句研究の仕方 森東氏選

三〇銭(川協會員章提示の方は二十五銭)

大阪市西區筑前橋電停前 昭和ビル三號室

會柳兼 會日
費話題 場時

幹事 潮花 水客・ライト・變人小柳子

電話土 3333
S163
S164

に宛記左は方いし欲の内案會句
し載登に簿名内案。いさ下でん込申
。すまげ上し差を内案御の會句て
宛花潮尾丸 内所務事雜・川

純國産品

ペン・リ・ツツム

書きよく
錆びず
強く
値の廉い

發賣元 大阪市 株式會社 澤井商店



恩師麻生路郎先生の絶大なる熱心力、深甚なる川柳愛により育まれた「川柳雑誌」が今や創刊十五周年記念特輯號を世に送られることは創刊以來先生に私淑し來れる迂生の歡喜之れに過ぐるものはありません

不朽洞門の我等夫妻茲に謹んで御慶び申し上げます

北支那張家口東安大街一七號

岩崎柳路
同松代

電話二三五番・二三七番

座談會

そのグループがどんな人たちで構成されて
るかと云ふことを川柳移動座談會の形式
で紹介することにした。各地、各會の聲質
を乞ふ(編輯局)

大坂を詠んだ 川柳に就いて

鮎「それでは、之から不朽洞座談會
を開き



鮎美 鮎美
君 鮎美
「大
阪を詠
んだ句
に就い

て」語り合ひたいと思ひます。
先づ先生からお願ひします。一

路「大坂を詠んだ句ではかほる君の
『大坂は襟かれかけてもよいとこ
ろ』などは非常に特色があると思
ふ。それから古くは力好君の
氣のふれたやうに靱は敷をよみ
も大坂の色がよく出てゐる。

今の靱は其頃とは全く違つてゐる
だらう。どんなに變つてゐるか知
らないが、それと同様に、ただ大
阪の句といつても時代によつて變
つてゐる。法
善寺な
どもす
つかり
變つて
しまつ



山雨樓 山雨樓

た。随分面白い句もあつたが、近
頃の川柳家に法善寺といふものが

あまり關心を持たれぬやうになつ
たので法善寺の句を見なくなつ
た。」

鮎「山雨樓さんは大坂を暫く離れて
ゐられますが何か記憶に残つてゐ
る句は



雙人 雙人
君 雙人
「さ
せんか」
ありま
うです
なア、

風水害の時の
大毎もとまり豆腐屋もとまり(豆
秋)
の句が被害がひどかつただけにい
まだに印象に残つてゐます。もう
一つ鮎美さんの蠟燭の句がありま
したが、

鮎「濁流の句ですか」

鮎「濁流へろうそくの灯の片ちびり
でせう」

變「大毎もとまりの句は豆秋さんの
句であつてこそ面白いのと違ひま
すか」

路「勿論それもあるが、時事吟とし
ても面



十里九 十里九

白いと思ふ。
今日武
玉川の
評釋が
あるやうに、將來の川柳家にとつ
て何故大毎がとまつたんだらうか
何故豆腐屋がとまつたのか、とま
つたのは何であるかを説明する第
二の省二、東魚、秋の屋の諸君が

現れるだらうね」
山「本誌で連載した日本名所名物川
柳をゆ



八歩 八歩

鶴を連れてきたいなり」を面白く
思ひました。處が私は實際の松鶴
を知らんのだが聞きたくなつたね」
路「松鶴と云ふのは大阪落語の重鎮
で、いゝ旦那だつた。何も落語家
をしなくともよい資産をもつてゐ
たが、話が好きでやめられないの
だ。あの人が斯う扇子をブラ下げ
てニタ／＼笑つて舞台へあらはれ
ると皆がもう笑つてゐたものだ」

里「あの原句は枝鶴になつてゐたが



豆秋 豆秋
君 豆秋
「松
鶴に

たんだす。枝鶴は松鶴の弟子で、
今の松鶴はその枝鶴が襲名したん
です。『天王寺詣り』やつたら松鶴
が本家だ」
八「此頃は出てまへんな」
里「吉本へ出ました。大阪落語研究
會で、何やつたら一席やりまひよ
か」と里十九氏獨得のデエスチエ
アで『天王寺詣り』の落語の梗概
をあつさりと片づける。

豆「天王寺の句では
『竹獨樂の音も春
らし天王寺 (其
象)』といふのがあ
りますな」

路「螢ヶ池(刀根山
病院)で長く闘病
生活を續けてゐま
したがもう死にま
した」

艸「大坂辯の句はおまへんか」
鮎「儲けるに恥も面子もありまつか」
といふ
のが閑
生さん
の句に
ありま
す。」



夕鐘 夕鐘

夕「かほるさんの句に
巴城五十銭がんにうろたへる
豆秋さんの句に
ストツプが分らんのかとおこり
やはり
といふのがおます」

艸「柳秀さんの句に
『たへものは大坂だつせさうだつ
せ』といふのがあります」

路「先生の句にも、
『海の荒鷲あゝそれなのに死にや
はつた』
と云ふの
がありが
すな」



艸樂 艸樂
君 艸樂
「大
阪辯

路「大坂辯は大坂のカラーを出すの

風光と季節料理の美味に恵まれた...
別天地

住吉公園
温泉料理
大御宴會御會食に
是非御利用と、
南海
電話住吉三九八九番
(南海本線東出口南半丁)

に非常にビタリと来るが大坂辯で
なくともよくカラーの出た句があ
る『箱ずしはよんべの色の新世界』
といふのは、かほる君の句だが、
よくカラーが出てゐる」

鮎「千日前仁義をかはず夜の底
といふのは豆秋さんの句でしたな」
豆「阪急で川柳と人形の展覧會があ
つた時に、その仁義の僕の句にそ
へて人相の悪い人形がありました
が、そのためか賣れまへんだ」

鮎「店は大坂にあり茄子の花といふ
のを憶
えたま
イすが、
君 だれの
句やつ



丹 丹
君 丹
「大
阪辯

丹「えゝ、句でんな」
豆「開路さんのです」
鮎「先生の
『惚れたやうな惚れられたやうな
顔して物干』
といふのを一寸説明して下さい」

路「あれは色町の物干です。夏はあ
ついであまり客が来ない。それ
で大屋根の上へ大きな物干を造つ

たものだ。和製バルコニーだ。物干といふよりは涼み台や。其上で呑まして呉れるのだ」

タ「新町の柴藤にもあります」

八「つまり京都の河床やなア」

路「あ、云ふ物干は紙治小春の時分にもあつたんやろう」

里「おまへんなア。物干は今でもありまっせ。竹



路「なんかい」
君「一寸意気なも」

んだつせへ、」
と咽喉を鳴らす。

タ「何アんや」

里「よろこんでるのや」

鮎「大阪と月と云ふ様な句はありませんか」

豆「晝の月難波新地で引つばられと云ふ僕の句があります」

タ「賞感の句だつつか」(笑聲)

豆「まだあります」

はしご酒大阪中が寝しづまり」
鮎「玉出驛で寝たといふのはありませんか」

豆「あの時は一寸句がまとまりません」

タ「鮎美さんの句におましたな、前垂の大阪辯の目早きといふのが」

鮎「ライトさんは何かありませんか」

ラ「私は大阪で生れましたけど、大阪にゐて大阪の句はあまりよんでません。川柳を作りはじめた頃の句で、

あれである天保山へ無事な顔押されつゝ見るお多福の顔のびといふやうなしようむない句です」

豆「八歩さんに

大阪をたづねあぐんでダムの風といふのがあります」

八「私は因州稲葉の鳥取ですが、大阪へ来た時に心齋橋の上で地図を

広げた事がありますが、今でも心齋橋の丁度此邊で地図をひろげたのだなと思はれる所があります」

里「そら、今の心齋橋だつつか、以前の橋だつつか」

路「大阪の句がない？ 生れは大阪とちがふのかね」

形「生れは淡路です」

路「名は大坂やが」

明治時代に大坂榮といふ人の本を讀んだが其人と何か関係でもあるんですか」

形「ありません」

鮎「橋に關係した句がありませんか」

山「大阪の橋で濁らずに讀む橋が一つあるさうですな」

路「三つある」

山「近頃殖多たんですか」

形「老船員心齋橋の晝歩くと云ふ自分の句を思ひ出しました」

ラ「私の句では

娘みな降りて心齋橋の朝」

山「先生の句に

友達をみんなだまして南に居といふのがあります」

鮎「山雨樓さんの



大阪でだまされたの、形も修業や

八「わたし、まだそんなに歳をとつてません」

形「形水さんはありませんか」

路「大阪の句は一寸頭にありません」

潮「私の句では、

大阪はビルからビルへ虹が浮き高架線大阪城の見える驛位です」

鮎「變人さんは」
變「難波橋濡れてゐる人濡れぬ人」

山「開路氏の句に

戎橋働く人につきあたり先生の句で、

道頓堀橋は流れて戀に生き」

山「漫才屋が戎橋を雨の日に通つてゐた時の句で『戎橋出番をいそぐ傘をあげ』といふのがあります」

可會 水谷 鮎美

福田山雨樓

西田山雨樓

奥村丹路

永田里九

大西八歩

須崎豆秋

姫田夕鐘

妹尾變人

加藤ライト

丸尾潮花

大阪形水

本社 麻生路郎

同 麻生路郎

邊 小川武

鮎「かほるさんの句に

櫻の宮うるしにまけた人に會ひといふ面白いのがあります」

山「變人さんの句にも、

淀川だ鐵橋だ子供やおこしといふのもあります」

里「我ばしの私の句には、

なにげなく襟かき合す我ばしおちよやんと暫くはなす我ばし」

鮎「岩おこしの句を少し御紹介します」

大阪を立ち退きぎわの岩おこし (雅幽)

岩おこしもう大阪を見限る灯 (山雨樓)

大阪の嫁がこゝろの岩おこし (雅幽)

路「大阪紹介の句は、僕が『大阪日

々』柴谷君に漫畫の挿畫を入れて貰

つて書いた大阪見物の中に

大分ある。拙著『川柳漫談』を出した時から十年も前の記事で當時非常にうけた。社内でも愛讀熱が沸騰して印刷場を通ると、今日は何處へ行きなはると訊かれた位だ。當時の主幹上總天香さんが、私に大變親しみを持つてくれて、『大阪見物』を私と社に居る柴舟君とに依頼したものだ。二人とも朝が遅いのであの記事は朝の大阪見物は一つもない。其頃を回想すると三越が床をおとして、其儘這入れる時で、入口で足を出すとカバーをきせてくれた時代です」

八「さう、みんな足を出したもんだがな。悠長なもんだ。」

鮎「座談會はこれ位で閉會させていただきます。丹路さんには筆記役ですみませんでした」



君「潮花君の挿畫を入れて貰つて書いた大阪見物の中に

江ノ浦あ
えとんかつ
とんかつ
おんべ



神戶三宮
樂天街
さくらば
おんべ

形「大阪の句は一寸頭にありません」

鮎「かほるさんの句に櫻の宮うるしにまけた人に會ひといふ面白いのがあります」

路「大阪紹介の句は、僕が『大阪日々』柴谷君に漫畫の挿畫を入れて貰つて書いた大阪見物の中に大分ある。拙著『川柳漫談』を出した時から十年も前の記事で當時非常にうけた。社内でも愛讀熱が沸騰して印刷場を通ると、今日は何處へ行きなはると訊かれた位だ。當時の主幹上總天香さんが、私に大變親しみを持つてくれて、『大阪見物』を私と社に居る柴舟君とに依頼したものだ。二人とも朝が遅いのであの記事は朝の大阪見物は一つもない。其頃を回想すると三越が床をおとして、其儘這入れる時で、入口で足を出すとカバーをきせてくれた時代です」





川柳塔

路郎選

大阪 橋本 綠雨

水の湧く薄暗い溪続く也
大杉に傘が小さくなつて見へ
五十鈴川手を洗つても立ちのかず
頂上で仰げば雲は見當らず
水少しにごらした鱈一つ

大阪 高橋かほる

垣白く塗られ西洋花が咲き
従業員長谷の牡丹を見た話
鯉轍上げ掌に筋が入り
寫眞屋に一寸奢つてみたくなり
地玉子を數へさされる小間使

大阪 奥村 丹路

春もや、隣は第二夫人が居
六麓莊あゝ家が建つ家が建つ
いさかひの少くなりし見いもミ
寂しさのさうく月の昇るを見
或日主人市場に申すこを見た
愚考仕候に書き馬鹿々々し
某日馬鹿々々しき春に思ひぬ

大阪 北山 悟郎

盃を手に皇軍を論ずなり
僕先生酔うてますかさくだを巻き
大阪に愛憎つかして落ちぶれる
マア好いサ今に天下を取る氣持

兵庫縣 水谷 鮎美

病院の看護婦さんへ春の雲
ハツケミの裏からのぞく畫さがり
唐辛子君は相場の欄を讀み
香水がにほふ男の瘦せてゐる
さくら漬母老境にいり給ひ
二階から見れば單獨行爲で居

長男光男入學

大阪 姫田 夕鐘

あそこらが大阪だつせ春霞
「花折るな」テリキの札が景をそぎ
蛇は出るかミ先に聞くハイキング
住友から見れば針の穴ほぎの儲け
すく／＼のびたがませた口をきき

大阪 市場 淺食子

ボートクラブ組に連なるうちのほん
金魚すくひへよち／＼歩く子も通ひ
試すは愛の不足の表示です
養子タイプミ人の蔭口
貸し金は呉れず店へは寄りつかず
戦場を銃後につなぐ慰問品

大阪府 妹尾 變人

くじ引きで連れて行くのも子澤山
むかついてゐるらしい笛だ交叉點
一日を嬉しがらせる手紙來て
満員へ割込んでるて文句言ひ

大阪 大西 八歩

二月堂飛んでも見たいここに建ち
葉櫻にタンゴの足の軽さ踏む
啄木を生みし山見ゆ山かなし
あゝかくて理性は春の灯に食はれ
すべつたら丁稚にするに勵まされ
千日前、象が三疋鼻を振り

大阪 須崎 豆秋



柳界展望

全國川柳界のこと各地川柳人の一擧手一投足を此展望欄ですくわかる様にしたい皆様の御通信を歓迎する。(係)

消息

▲東京の福田山雨樓君は八日の不朽洞座談會へ出席の爲來阪された。十日には川雅事務所を訪ねられて、折柄有恒川柳會へ出席の路郎主幹と共に有恒川柳會へ列席された。

▲路郎主幹は五月二十一日夜五時半より三十分間、BKより「戦線と銃後の川柳」と題して放送される事となつた。

▲森雞牛子君(大阪)は大阪帝國大學醫學部附屬醫院本館地下室へ入院された。病因不明のことと一日も早く全快を祈る。

▲古谷昂堂君(有恒川柳會)は去る五月十日第一補充兵歩兵として、應召、勇躍〇〇へ入隊された。

▲庄方よし君(大阪)は市參事會員の一行で六月三日約十日間の豫定にて、台北、嘉義、打狗へ視察旅行をされるとの事。

▲西田紳樂君(不朽洞會員)が擔當されてゐる薬石新報柳壇は薬石新報が五十周年に相當するのて其祝賀のため薬石新報社主催の川柳大會が別稿の如く開催されるので川柳家諸氏はこぞつて來會されたい。

慶弔

▲富岡巨人君(大阪)は四月十七日次女を擧げられ、陽子さんと命名された。

▲本社賛助員窪田銀波樓氏(金澤)の令閨多つ刀自には御病氣中の處、去る五月十六日、五十四才で逝去された。謹んで御冥福を祈る。

轉居

▲落合四郎君は和歌山縣箕島町へ。

▲元吉木馬君は尼崎西本町七丁目三一〇へ。

▲大森千代香君は廣島市仁保町青崎世羅新藏方へ。

改號

▲大西治水君は伊佐緒▲馬越華蝶君は花蝶

正誤

▲二月號一路集ゴムバンドの最後の三句は閑生君の作。

★社告

▲五月一日日本社下關支部を開設した。幹事は多田市他樓君、後見として櫻川不水君が當られる事となつた。

▲左記二支部は四月末日限りで解消した。

光耀會(大阪) 伯耆支部(鳥取縣)

三輪車愛國行進曲で行き
大臣の西下鹿寄せしてあそび

大阪府原 宮岡 白峰

花の咲く事でもめてる公休日
花の春母の年なぞ書いて征き
百圓をくづして貰ろた日曜日
首に巻き腹にも巻いた千人針
刑事室取られた方も叱つさき

大阪 加藤 ライト

前掛の下へ産月迫つてる
月給は違ひ娘は同い歳
戀人の笑顔現像液へ出る
思ひ切つて打ちあけたのが夢

今 治 鳥生 古弗

みだれ髪昨夜の夢をたぎつてみ
標札の主人はずつ前に死に
醜さも包んでくれるネオンの灯

大阪 正本 水客

ハンドバツクから三の糸出してくる
坐るなり蜜柑を一つこつて食べ
明日ゆく土地は妓の生れた地
部屋へきてハンドバツクをボンゴ抛り

豊 中 黒川 紫香

友より戦傷の報聞く
傷ぐらい蹴飛ばしそなた便りが来
八九人見されさせてる浚漉船
いかけ屋へ立つ子の一人わるさう

大阪 丸尾 潮花

平凡に生る女の多趣味なり
純情であれさ娘は育てられ
うたゝねの枕一冊ひきぬかれ
大阪は夢の捨て場もない處

大阪府高石 大坂 形水

車窓暖かチルチルミチル顔並べ

膝の子へよその母ちやんつりこまれ
初節句本尊さんは晝寝中

大阪 金田 並木

兜虫の如くバス春を行く
病身にスキ空しく塵ミ居る
庭下駄に芒頭を垂れてをり

○

金 深 安川 久留美

喋舌つて名刺一枚損した日
はなむけのなく水兵のそれつきり
昂奮し口が尖つて味方ほし
梅干の種に人生観が有り
悪口をありだけいって笑ひこけ

大阪を訪ねて 大連 佐々木 三福

軍國の大都頼もしく煙る空
何音耳底を壓す街の晝
この河の上を生れて船で死ぬ
目まいするほぎ馳け巡る紙幣銀貨
物皆が動きのちを摺りへらし

兵庫縣御影 長崎 柳秀

鞘はらふ日本刀は風を切り
落ぶれて居ても糸圖のこみを云ひ
二度出来ぬ顔でわさびのききを賞め
腑に落ちぬままに見學次へ行き
親切の一足おそひ情死沙汰

大阪府廣寺 山本 雨迷

花の夜の影の二人は曲り行く
我門の灯影ほ、笑み濡れてる
過ぐる日の唇褪せて相對し
嘘にても女の心は胸に倚り
散り果てし櫻あやしむ者も無し

病床の子に花の咲いたを聞かれたり
軍用機かすみへ消えてからの音
呑みあいたボケツが淋し五錢玉

廣 島 植山 九天

新刊紹介

川柳案内

六號活字十四字詰三行
金五錢十錢(一行増す)
とに金十錢(但し前金
切手代用可) 句會案内
柳書廣告その他

池澤丈雄著
曾て本誌に「柳言餘滴」の隨
筆を寄せられた才人、池澤丈雄
氏の創作と隨筆集で紅茶のあと
の好讀物「柳言餘滴」も又本書
中に收められてゐる。白井喬二
氏の序、鍋井克之氏の裝幀。洋
裝函入、四六版三〇五頁、定價
一圓半。發行所は大阪市南區難
波南海高島屋内館同人會。

和田斐太著
市井の哲人として知られた和
田斐太氏近來の快著である。氏
は喫茶アジアの經營者であり、
儲かる建築の設計者でもある。
「生活風景」其他多數の著があ
る。定價一圓八十錢。發賣元大
阪市東區博勞町四丁目丸善株式
會社大阪支店。

川柳きやり
菊判每號七十數頁
毎月一日發行一部廿五錢
東京豊島區高田本町二ノ一四
六八 川柳きやり吟社

京
一部十錢 一年一圓
京都市西木屋町四條下ル
發行所 京都川柳社

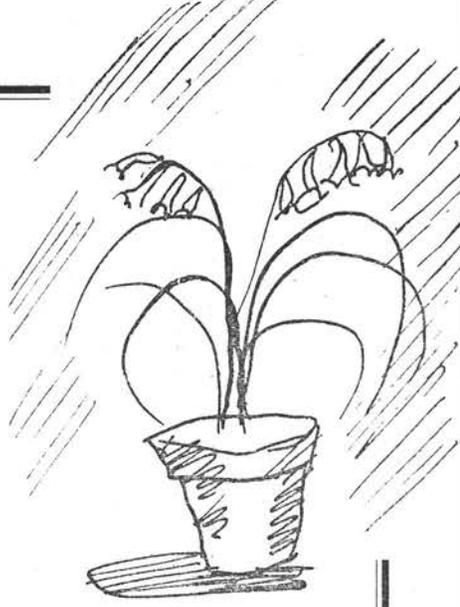
月刊
川柳みちのく
一部十五錢 一年一圓五十錢
青森縣黒石町 川柳みちのく社

三味線草
一部廿錢 一年二圓
大阪市此花區西九條二ノ六二
大阪媛柳川柳社

懸賞川柳
課題「百」六月十日
「はみがき」七月十日
用紙は官製ハガキ(化粧柳壇と
明記の事) 選者麻生路郎氏
秀逸數句に薄謝を呈す
宛先 大阪市西成區玉出本通
三ノ三六 麻生路郎氏方
化粧新聞社柳壇へ

ルビヒサア

社會式株酒麦本日大



白骨の舞踊

今村思老山

「川柳雜誌」十五周年の御祝ひに寄する一文としては如何と存せられる故人の話であるが、午前中に葬式に出會へば縁起が好いとも言ひ、墓場のお供へ物を盗んで食べれば贖力ができると喜ばれ、石碑の破片を懐中すれば賭け事に必勝するともいはれて、我々下々の人種では嬉しがられる。この建て前から敢て無禮も省みず、茲に逝ける鬼才我藤村青明の追憶を物して路郎御大の御機嫌を伺ふ事にする。

四月號の安川久留美氏「須磨の今昔」の文中「……青明の死んだ海は荒れてゐた……」の一節を讀んで、ぼくの舊い記憶が、文人としての感傷に蘇つて妙に目頭が熱くなつた。記念すべき十五周年に、端なくも青明氏の追憶にペンを持つやうになつたといふことは故人の魂魂が、ぼくを通して親愛なる同人諸君に相見えやうと、茲に登場するに至つたやうにも感ぜられて、我が胸は打たれる。これを嚴肅な気分と言ひたい。

大正四年八月二日——この日

郷直彦氏。

編輯局同人

(故)吉田王郎

高澤初風

奥屋白暮

(故)藤村青明

森川舟三

今村思老山

である。もう二十四年も前の事になる。

神戸楠公社の東門、神戸新報社の編輯局(社長は現在神戸新聞通信社の社長本

郷直彦氏。

編輯局同人

(故)吉田王郎

高澤初風

奥屋白暮

(故)藤村青明

森川舟三

今村思老山

當時青明は二十七歳だつた。

ぼくが二十四歳、吉田王郎が編輯長格で青明と社會面を編輯し奥屋白暮が二面を編輯し、ぼくは縣市政、選挙、今岡某が海岸記者、森川舟三が美少年で初記者、松室某ら外二三人と警察廻り、ぼくは好んで人物評論「朝野の人材」を連載して大臣宰相を豈得べけんやの文體で批判して得意だつた。そして詩人肌の青明は色の淺黒い、年よりもフケた面貌をして超然たる存在だつた。高澤初風は、年増と同棲してゐた、目玉の大きい彼だつた。劇評に優れた手腕を持つてゐた。

今から往時を想望すると何となく浪六の「當世五人男」の風懷が浮んで来る。暑い或日の午後、夕景頃だつ

暑い或日の午後、夕景頃だつ

た。編輯局に驚くべき情報が入つた。

「藤村が須磨で溺死した」の一語だ。

居合せた同人は顔を見合せて驚愕した。

午前中は社に居て、けふから(八月二日)暑中休暇だといつて出て行つた姿を、ツヒ先刻見た一同であつた——れば

彼の姉は、花隈で藝妓をしてゐた。その屋形から通勤してゐた彼。

母も在つた。

悲しい胸の迫る翌日が来た。

其日の夕刊に奥屋白暮が記事を書いた。

嗚呼藤村青明君

本社記者藤村青明君、名は一君は昨夏本社の草創時代入りて社會部に席を置き特に優艶の筆を揮ひ、紙上の情趣をして爲めに芳烈たらしむる事蓋し妙しとせず、殊に君の磊落淡淡なる性情と溫容主角なきの態度は自づから社中同人の友情を一身に聚むるに至る、君又關西川柳界に其名を誦はる、斯界の奇才なり。今夏の劇務を果たして昨日一週間の休暇を興へられ、身心の勞を慰せんとして、松風浴をこる須磨海水浴に赴き半日の快に浸らんとせしに突如心臓麻

痺を起して長逝せらる。噫須磨の松濱、哀愁の浪、音低うして社同人亦悵然恨深し、君享年二十七。有爲の材を以て遂に再度歸り來らざる也。近詠に曰く。

十對、葬送いとも靜肅に湊川善光寺出張所に於て葬儀執行、終りて會下山火葬場にて茶毘に附したり、此日炎天、蒸著くして風蕭殺、白日暗き思ひありて哀愁人に迫りいと悲しかりき

翌三日の葬儀記事は、ぼくが書いた。

本社員たりし青明藤村一君の葬儀は昨日午後五時卅分北長狹通六丁目一六一の自宅出棺、喪主實姉若よし子、施主本社員吉田王郎氏其他會葬者神戸各新聞社員、阪神の知己朋友及び本社員多數にして市内各檢番料亭等よりの供花數

かくして我天才詩人藤村青明は他界の人となつたのである。久留美氏の

青明の死んだ海は荒れてゐたの一節は、茲に新たな強い響きを傳へて来た。

彼の靈は、今現はれて關西川柳界の隆運に嬉し泣きに泣いてそして「川柳雜誌」の十五周年記念祝賀に、白骨の舞踊を見せ

川柳評釋百句

一步一步 一步一步 一萬二千尺

六文錢

富士の踏破も裾野の一步からである。努力々々。

死ぬまいと手を變へ品を變へて死に

叱 吃 郎

ソレ灸だ。ヤレ鍼だ。注射だ。禁厭だ。天理教だ。手を変へ品を變へて見たが助からぬものは助らぬ。自然の法則は誰も破れない。

借りて来た金をチツプにも使へ

弦 月

タツタ一圓さいふ勿れだ。借りて来た金の脆くもくす

麻生路郎

れのか姿の一部―それがチツプだ。誰が知るものか。苦い〜經驗だ。

此の人出みんな生きてる恐ろしさ

紅太郎

銀座であるか、道頓堀であるかは知らない。人間一人々々の集積、魂の勇躍、考へれば恐ろしくなるのも不思議ではない。

お叩頭した金一封の軽さかな

無冠王

事程左様に大きな金一封であるのも滑稽だ。紅白の水引に墨痕鮮やかな薄謝の文字もうらめしい。

てみる、それは間違ひなくよくの目に見える。

川柳雑誌と私

阿部佐保蘭

昭和五年の七月に初めて近作柳梅へ句を送つた處、偶然にも八月號のトップを切り、思ひがけぬ朝田新水君からの御手紙を戴いて、嬉しくなり、それからずつと川柳と私の縁は續いてゐる。新水君ともその後ずつと懇意にして戴いてゐる。近頃はSHKの仕事に追はれて、句も怠け勝ちで、誠に相すまぬ譯であるが、これでも月評に選ばれるやうな句を創つた時代もあつたのである。その當時がなつかしくなつたので第七巻第九號をとり出してみる。

雨樓提出の拙句「朝の濱歩けば逃げる蟹がある」の見えるのもなんだか恥かしい気がする。路郎先生、山雨樓、ひろし、町二紋太先生の夫れくの卒直な短評も嬉しい。編輯後記其他をみると路郎先生がこんなことを書いてゐられる。「残暑がきびしいので、編輯に校正に大いに努力を要するものがあつた。殊にごつた返した校正室の中は蒸風呂のその如く壓迫されるものがある。扇風機はあり乍ら原稿紙が散るので、これを利用してすることが出来ない。その労苦は察するに餘りがある。緑雨、山雨樓、雨町君等の額からジリ／＼と汗がにじみでてゐる。道に殉ずる人々の斯うした尊い犠牲を見るたびに、それが單なる遊戯であらう筈がない。かかる情景に接する毎に、私は「川柳雑誌」よ、永久に生きよ。と呼ばざるを得ないのである。「私は何かしら眼がしらの熱くなるのを覺えた。そして本職をなげうつて迄川柳の道に盡瘁してゐられる

閑人苦有アイフわかもご養命酒

不水

胃が痛む。肩が凝る。一體今日は何をしたのか。生甲斐のないこゝおびただしい。

御近所へも聞かし催促歸るなり

雅幽

それではいつ伺つたらいいのです。今度は間違はないやうに願ひますよ。催促されてる方の聲は少しも聞へないが、大ていは想像がつく。

産婆悠々湯です水です

曉童

経験に経験をつんだ産婆、でつぶり太つた五十過ぎ、せかず騒がず産婦の夫をこき使ふ。

初戀の顔に似て來る人形師

耕朗

人生人形師なる、既にロマンティックである。しかも作るころの人形の顔が初戀の女の似顔となる。ロマンティックの極致といふべきか。

片假名の草ばかりあるバルコニー

紫明

チュウリップだ。フリーチャード。アスパラガスだ。アネモネだ。アマリスだ。バルコニーの隅にはビール壘が轉ろがつてる。

お隣も閉めていよく虫の聲

一兵

今の今まで大きな話し聲が聞えてゐたお隣りも、いつの間にか戸締りをして寝てしまつたのか、もうあかりがささなくなつて虫の聲が一ト際ハツキリ聞えて來た。

教へ子を勧誘員として訪ね

文庫

世事に疎い老教師の末路か。たご千圓の保険に加入してくれたにしても責任額へは遙に遠い。

我々の家にあるから贖になり

黙漁老

祖父の代に私の家へ頼山陽が一泊したんだ。その時に書きのこして行つたのが、この七言絶句の一軸だも云つても、それを誰がほんこにするものか。



あらゆる趣味のお稽古場

松坂俱樂部

會員募集

手はごきから奥義まで
氣軽く、楽しく、御上達

お稽古目

- 長巻 常磐 清元 小唄
- 尺八 舞臺 謡曲 能樂
- ピアノ 聲樂 日本畫 茶道
- 華道 料理 俳句 川柳
- 氣楽 棋道 松坂レコー 吹込

川柳講座
川柳雜誌主幹
麻生路郎先生
擔當

御申込 七階松坂俱樂部
電話(代表)三〇〇三番

松坂屋

大坂日橋

川柳書架(七三)

昭和十二年 川柳特選集

和田天民子編著

▼本句集は「昭和十一年川柳特選集」の後を嗣いで刊行されたもの、後半には著者の雑筆が掲げられてゐる。

▼昭和十三年四月十日發行。四六版和綴。句集一二二頁、雜俎二六頁。定價金壹圓廿錢。發行所 東京市牛込區揚場町八番地 昭文館

▼編纂者法學博士和田天民子の隨筆評論は頗ぶる平易に書かれ、しかも公平無私である點に於て尊重せられていゝものだ。一讀を薦む。

藥石新報社創刊五十周年

記念川柳大會

日時 昭和十三年六月十八日午後六時半

場所 大阪市東區今橋二丁目神田ビル 友和俱樂部

兼題 「本復」 麻生路郎氏選

兼題 「成功」 西田艸樂氏選

挨拶 藥石新報社々長 安東長義氏

講演 題未題 川柳雜誌社主宰 麻生路郎氏

席題 選者 葎乃、綠雨、かほる、豆秋 丹路、鮎美

會費 參拾錢 (乞鉛筆持參)

賞品 兼題 天地人五客 席題 天地人 幹事 夕鐘、變人、八歩、ライ

ト、水客、紫香、潮花、美知夫、南邊路

主催 藥石新報柳壇

協★川

川柳人協會の仕事が 界そのものが向上する譯である 川柳人間にボツ／＼理 から、まことによるこぼしい次 解されて来た。私にし 第だ。しかし、理解しつゝある 解は少し早すぎると思 割合に實行に這入つてくれる人 と信じたら共に手を繋いで斯界 。微力な自分としては楳根の續 ぶが一日も早い方が柳 のすくないのを遺憾とする。特 のために働いて欲しい。私のか くり働いた。(路郎生)

久良伎翁古稀祝賀

日本柳壇の耆宿坂井久良伎翁(川柳人協會名譽會員)が 齡ひ古稀に達しられたことは まことに慶賀に堪へない。 翁は資性穎敏直情の人、私 財を投じて多年、柳壇のため に貢献されたことは何人もよ くこれを知る。 茲に我が川柳人協會は古稀 祝賀記念品贈呈資金を普く天 下柳人に募る事とした。左記 記念品贈呈に就いて



久良伎翁

小規に據り御賛同を乞ふ。
一、記念品贈呈資金は一口三拾錢の こと(一口分を頗ぶる小額とした 理由は川柳人及び川柳に關心を 持つ人々の一人でも多く賛同せら れんことを希望するに外ならない

幾口でも申込んで下さい)
一、記念品贈呈資金の受付は八月三 十一日までとしたが、賛同と同時 に、御送金ありたい。
(比較的長期とした理由は出來得 る限り長く知らしめたいからであ る。)

- 一、右の件に關するお問ひ合はせは 返信封入のこと。
昭和十三年二月
- 川柳人協會
- ☆陶呈者御芳名
- 十口 岸本水府君(大阪)
 - 十口 草雉川柳社殿(名古屋)
 - 五口 富本無煙君(大阪)
 - 十口 岩崎路君(張家口)
 - 十口 藤崎松代君(同)
 - 十口 阿部保秀君(大阪)
 - 十口 長崎柳秀君(大阪)
 - 十口 阿部保秀君(東京)
 - 小計 五十五口 累計 九十口

船の温泉へ

別府線で 勝浦線で

大阪 午後五時發
神戸 同六時四〇發
和歌浦 同九時四〇發

(一日で那智、下ロ 遊覽 翌早朝歸着)

勝浦線時間大改正

大 阪 商 船

— 案 內 書 進 呈 —

白鶴

酒 清

食ふとんがら

湖月

店 茶 地 法 善 寺 境 内

各地柳壇

規 清 稿 投

- 一、用紙は原稿用紙又は投句箋の事
- 二、文字を正確明瞭に記載のこと
- 三、開催月日及場所記入のこと
- 四、締切は毎月廿五日とす
- 五、投稿先は本社宛

本社四月例会 (大阪)

出席者名(順不同)

路郎、潮花、ライト、よしみ、變人、粒
 子、雪春、富士、並木、默平、風葉、紫
 香、百雷、水客、澄風、四郎、かほる、村
 句茂、豆秋、夜王、芳醉、巨人、双葉、
 よし江、愛二、大溪水、五扇子、霞乃、
 アキラ、智美、

兼題「豫 算」

枚方で降りる豫算も入れて置き 豆 乃 選
 切詰めた妻の豫算へ誓ひ立て 默 平
 豫算通りにすると義理少しかき 澄 風
 きつちりの豫算へ密附を出しし 光 乃
 貯金など出来る豫算をこしらへて 水 客
 新築の豫算以上の金が入り 巨 人
 香典も豫算の中に入れておき よしみ
 豫算から見ると貯金の出来る筈 同
 (人)其の豫算親の許しを待つば 同
 (人)一本の酒までやめと云ふ豫算 ライト
 (人)二次會も豫算に入れた財布 巨 人
 (地)値切られることも豫算に入し 同
 (地)豫算の中に彼女の笑ひ 變 人
 (天)機密費も市利かして居る豫算 村句茂
 (軸)野の百合を見ま豫算の日を添え 霞 乃

席題「弟 子」 (十四字詩) 路郎選

鉦の音にも親方と弟子 澄 風
 名刀を打つ弟子玉の汗 巨 人
 弟子の我儘じつと視てゐる 夜 王
 俺の弟子なり眼のつけどころ 紫 香
 ニユース館弟子つれられて見る 芳 醉
 砥石ゴシ／＼弟子の日課よ ライト
 大戸がおりて弟子連れて出る 潮 花
 むかしの弟子に食はして貰ひ 豆 秋
 弟子ホツとする師匠のひるね 變 人
 弟子も一緒の正月の膳 並 木
 出征の後ひきうける弟子 同
 娘が惚れて二代つぐ弟子 大 溪 水
 恩を裏切る弟子の行く末 同
 跡目の噂一弟子二弟子 双 葉
 變人にされ弟子腕が立ち 同
 弟子に教へる春の保津川 同
 火鉢を出して弟子はうつむく 同
 (人)兄弟子だけが秘密知ッてる 五 扇 子
 (地)弟子になる日をしめる角帯 默 平
 (天)長三郎なんでもう長谷川だ あいじ
 (軸)弟子の口から漬漬が知れ 路 郎
 席題「月 賦」 互 選
 月賦でも値切るとこまで度胸出来 四 郎
 ポーナスでやつと自分の服になり 並 木
 愛の巢へ月賦屋如才なく納め 夜 王
 街路樹を月賦の洋服ぬうて行く 芳 醉
 一年を月賦に追ひかけられてゐる よしみ
 新妻へ月賦の服をたゝませる 潮 花

席題「ネクタイ」 百雷選

ネクタイを撫でつゝねだる様に 風 葉
 甘つたるい聲でネクタイ直しに来 大 溪 水
 ネクタイへ男心が動くなり 村 句 茂
 ネクタイを結び直して應接間 夜 王
 ネクタイのよこれ生活のぞかれて 双 葉
 ネクタイの見立妻から抗議でる 默 平
 ネクタイを結んでやつて念を押し 變 人
 やつとの事でネクタイを賞めて 紫 香
 ネクタイの裏が出てゐる春の風 水 客
 (佳)ネクタイは女心のまま結び 五 扇 子
 (佳)ネクタイの柄に個性が溢る 澄 風
 (佳)ネクタイを結んでもろて 變 人
 席題「靴 下」 村句茂選
 考へた末靴下と決めておき 風 葉
 返盃をうける靴下破れてる 紫 香

席題「心 臟」 變人選

靴下が破れて世帯笑はれる 富士
 靴下は父には派手な特價品 默 平
 靴下の穴が大きい男の子 巨 人
 日曜の風は靴下乾く風 百 雷
 靴下の破れ欠勤續くなり かほる
 つゞくつてある靴下を笑ふまい 澄 風
 靴下へ旅の廊下が冷えてゐる 水 客
 靴下へ女としての目ごととどき 變 人
 席題「心 臟」 變 人選
 心臓の弱さを酒に紛ぎらせて 粒 子
 健やかな鼓動と産婆はめて行く 澄 風
 心臓の強さで今の椅子に在り 双 葉
 俺よりも女の心臓強いなり 芳 醉
 心臓の弱さ辭職をしたくなり 風 葉
 (佳)心臓の音がするぞと久しぶり 大 溪 水
 (佳)心臓の強さを笑ひ合ひ 百 雷
 (佳)心臓の強さは蔭でこぼしてる 双 葉
 (佳)心臓の強さへ妓笑ひこけ 変 人
 (佳)心臓の強さ出世が早いなり 芳 醉
 (軸)心臓の強さ書かれる時の人 變 人
 意外にも塗枕あり安ホテル 四 郎
 ホテルから曳舟見てる宵の雨 夜 王
 呑み込んで居ますホテルの支配人 村 句 茂
 からまでもホテル彼女を變はらさ あいじ
 行くとこへ行々仕舞ふホテルの灯 双 葉
 心中するホテルとなつて名を知れ 紫 香
 ホテルへ行かうかと冗談言と見る 巨 人
 あこがれの都ホテルの窓を開け かほる
 ホテルの灯淋しい旅と知ることい 變 人
 (軸)オリエンタルホテル本國船が見 豆 秋
 川 今治支部句會 (今治)
 五月四日 於 文 庫 居
 渡邊曉童報
 公休、埃、車座
 公休を理解してゐる若旦那 よしを
 公休の朝餉家中皆揃ひ 同

洋服へこれがスフかと背に廻り
その地位は眞つ先にス・フの服を着。
贅澤の靴下今のはス・フでした
洋服屋ス・フの見本を着て歩き
長生^{ス・フ}を着る憂き目を見
頼まれせぬに漫才ス・フをほめ
妻ひとりス・フの手入れを^{ス・フ}
ス・フにして後は梯子で消える金
まけたのをス・フと見らる洋服屋
いつち下の簞笥にス・フは入らる
ス・フの帯に鱗の眞珠光つてゐ
したつばと見泰テイラー、ス・フを見
ス・フ展の人形皆になでられて
國策にすまぬ服地を買ひ急ぎ
ス・フ着てもひけはとらない目鼻^{ス・フ}
降つて来たよとス・フおどかさ
これがス・フですと男工立たさ
ス・フにしたところで苦し子澤山

川 塗青支部句會 (大阪)
四月十二日 於謙公居 淺謙公報

師匠、花見、普請、隣
お師匠の口ぶりまねる五ツの子
京人形床に飾つて師匠留守
口三味の師匠坐つた儘教へ
師匠にも嬉しい人があるのなり
若旦那師匠に別な意見され
師匠ちと叱り過ぎたと思ふなり
初舞台師匠立つたり坐つたり
花見から戻る地獄の満員中
花見までには癒ると子のいぢら
花見から戻る都會の灯の匂ひ
普請場の工場監督服で来る
普請場で制服の子を説き伏せる
道普請重たい荷物後もどり
やりくつた普請と知らず褒めて
普請場を覗く節穴探してゐ

普請場へ丹前のまゝ覗きに來
普請場へあらぬ噂が流れたり
新普請見上げる父の腰が伸び
もう嫁もきまり普請も出來上り
若夫婦隣りへ留守を預けて出
お隣と同じ趣味で夜を更かし
物干へ隣りも並ぶよい日和
お隣りの噂は低い聲となり
お隣りの御飯がうまい子供達
眞黒な足で隣りの子が上り
お隣りの子を見習へと叱る父
ホットコーヒ賑やかに飲む女客
挨拶のお辭儀の長い女客
又来たかと噂されてる女客
女客顔に似合はぬ値切やう
女客床屋の晝を賑はせる
まだ負けて貰ふつもり女客
運轉手無理も聞きませ女客
腕白の寝顔もほめる女客
女客主人は奥へ引きこもり
女客亭主のあらを言うて去に
妻の留守女の客にチトあはて
うっかりと世帯にふれる女客
口止めはしたが氣になる女客
女客さつきのまゝで座つてゐ
電燈がついてあわてる女客

川 大鐵支部句會 (大阪)
四月十六日 明石吟行 正本水客報

新芽、元氣
病床へ新芽の庭が見せられる
あきらめた鉢から新芽ふと見つけ
空に雲雀新芽は靴にふまれてゐ
爆音が新芽ふるはす春の景
邸内は新芽野心のある書生
老公の背伸び新芽へ手がとゞき
元氣である丈の便りへ物足りず

元氣だせ春だ雲雀は啼いてゐる
ユニホーム元氣な聲で位置につき
舊友は元氣酒量も上つてゐ
重歴へ元氣も失せた腕を組み

川 下關支部句會 (下關)
四月十六日 於下關鐵道俱樂部 多田市他樓報

踏切、心配、花見、信號、日記、港
踏切で汽車待つ顔に父母がゐる
酔どれをハラ／＼叱る警備器
踏切で此處がわし等の村境
踏切で凱旋兵に双手あげ
踏切の重荷は馬へ聲を張り
入換の貨車踏切へ世辭を云ひ
踏切を迫れる様に通り返す
踏切でフト思ひ出す忘れもの
遮斷機が降りて氣が付くアドバルン
雲行を眺め出漁の夫想ふ
もう心配ありませんかと醫師送り
大ぜいの智慧で心配事もすみ
夢だけと氣になる事と朝の膳
着飾つた娘に心配な連があり
喰ふだけの心配はない置ゴタツ
押賣を断つてから氣に掛り
非常時で客まばらなり花の山
非常時が花見心をにぶらせり
花の山心のこして戻る雨
湖のほとり上と下とに咲く櫻
朝曇り今日の花見が氣に懸り
花の山今日もモダンを見せに來る
二人だけ花見の席からそつと逃げ
花便り病の床で聞くニュース
風に脊を向けて花見の席を取り
前の日に去年花見た席をとる
アベックは山の麓の椿を見
孫も早お酌の出來る花の山

雨になり花見支度で寄席へ行き
もう一本花見がはりにつけて呉れ
仰ぎ見る萬朶の櫻日本晴
盃の花一ひらを惜むなり
花の山虫を押さへた高利貸
戦捷の春を酔てる花の山
呑み連はまた葉櫻も約すなり
櫻見に百姓一日休んで來
花の山觀測鏡で見える兵士
蕾みの時から待つて居た花の下
非常時の花見鳴物遠慮され
陣中も日本の櫻眞盛り
日和山憲兵さんが花の番
夜櫻の酒の匂ひを今朝も持ち
お花見に誘ふ見合の下心
渡舟場に花見の客は押されてる
花の山友に割前出されてる
都々逸が軍歌に變る花の下
櫻咲き人に此の世の春を生み
七輪を下げて花見の迷ふ場所
過去などに觸れず花見て呑み給へ
踏切を越えて信號ハツキリし
信號機來る列車には敬禮し
交叉點赤は人波せきとめる
信號機肩いからせて汽車を止め
信號機降りて燕を立たしたり
交叉點信號灯の強い顔
闇の風吹かれて寂し信號機
ストップに犬引いた娘がはみ出
こんな事有つた去年の日記を見
泣いた日か日記にシミが少しあり
港頭の勇士武勳を誓つて出
出る船と別れを惜しむテープにて
激流の水せきとめて良い港
入港に日本は櫻まつ盛り
朝霧をぬけて靜かに入る巨船
出港の泡に未練をすてるなり
ドラ鳴つて大地を思ふ我姿

雑川 岡町支部川柳處女會

四月二十三日 於秀女居 丸尾潮花報
戀、慰め、白粉、海、入學、五月人形

上氣嫌父初戀を話し出し 清香
戀文のほこを集める子の無邪氣 智繪
戀人へ夜のつれづれを書き送り 小菊
戀心枯れたすみれを大事がり 美也子
戀しは別れてからの並木路 美津枝
慰めへ黒い眸が濡れて来る 秋子
今日も又自分一人を慰める 悠起
慰めへ身の上話なほつづく 芳子
増税は白粉にまではね上り たか子
白粉を付けてしげく見詰められ なほみ
もうこんな人出になつた海の色 波矢子
海へ来てさつぱりいくじ無い子供 悠起
波高し海を離れる飛行艇 小徑
何も彼もまつ新入學嬉しそう 梅京
金釘嬉しく見せる一年生 秀女
入學へカバンも買へぬ話聞き 須美
出征の父に知らせる入學日 小徑
近きし子の思ひ出もある武者人形 悠起
親心五月人形へ迷つて居 波矢子
初職り本家分家と立ちました 須美
初節句人形を送る知らせが来 美津枝

雑川 岡町支部會 (豊中)

四月二十二日

於支部事務所 丸尾潮花報

祝、花嫁、マーク、砂、唄

就職の祝ひ財布は空となり 伊佐緒
お祝の人形を持てばママと泣き 秀女
祝電へ惜しい一字が餘つて来 春坊
内祝新芽の庭に通される 水客
今日からは苗字が變る綿帽子 染史
水晶の珠數花嫁の手に光り 風葉
妹の花嫁姿淋しく見 清葉
花嫁が今出る辻の人ばかり 落葉

花嫁の車妹見てもどり 幸葉
花嫁へ女衣裳の事になり 美濃留
花嫁に仕立て、母の氣が疲れ 美津枝
毛を切つた事を花嫁悔ひてゐる 私水
洋装で来た花嫁の荷を氣にし 悠起
花嫁の思ひ故郷の母のこと 秋子
花嫁の影がのびてる金屏風 紫香
ただ乗れるマークを胸へぶらさ 波矢子
花マーク恥かしからぬ衿へ付け 一穂
重役に顔とマークをくらべられ 穂幸
就職のマークが朝の陽に光り 潮花
合服を出せば去年のマークが出 水客
日の丸のマーク出征の家と知り 草水
マークだけ一人前の男なり 風葉
腹這ひに海見る砂の温かさ 萬的
砂遊び作つた池で手を洗ひ 進
男の子砂遊びにもあきた顔 美也子
砂つけたまゝ夕飯の膳へ来る 美津枝
蟹の泡砂地の上に残りとき 紫香
握りしめれば砂のかそけ反杭よ 水客
一人者世間馴れたる唄を知り 美鳥
妓の三味へ調子はづれの唄が出る 楠美
鼻に付く程非常時が唄にされ 風葉
膝枕唄の拍子に起される 紫香
鼻唄で若さは春の床をぬけ 雪春
のど自慢そのかくし藝で見出され 伊佐緒
子守唄小さくなつて床をぬけ 春坊
淋しさを唄でまぎらす嫁きお 美津枝
ソプラノを邪見に消やす母であり 穂幸
喫茶店素通り出来ぬ唄を聞き 芳醉
湯女唄が聞える旅の湯にひたり 潮花
ヂヤズ小唄娘は長いまゆを引き 同
おあいそへ女給はやつと唄をやめ 同

水郷 一周年記念會

川柳社 四月十七日 於由利樓 今川柳影報

平和

(五)平和説き乍ら英米武器を賣り

五健

水郷川柳社記念大會



(五)冷笑へ老後の平和願ふ汗 ソケン
(五)何かやる子を取り圍む鳩の群 五健
(五)日出づる國は平和の銃を執り 南葉

南葉

煙
(人)春雨に煙るお城を舟に見る 不競
(地)砲煙の薄れくくに日章旗 曉明
(天)煙らせる妻にかはつた煙り 漫歩
辨當
(人)母一人娘一人辨當だけの花 大樓
(地)辨當へ我まを言ふ子の弱し 五健
(天)辨當に踏まれた草を嗤へまい 曉明
流
(秀)悠久の流れ神代を今も見る 不競
(秀)面白く流れを渡る家鴨の子 五健
(秀)牛洗ふ流れすつかり黄昏れる 南葉
(秀)ゆるやかな流れへ小石投じても 肱水
(秀)お流れへ平社員なる座り様 孝輔
(人)洪水に流れて来たもの笑へま 棕影
(地)濁流へ腹立つ手紙放り込み 太洋
(天)悠久の流れ人世短かいな 五健

新緑

(五)新緑の眞只中で深呼吸 棕影
(五)新緑を纏ふフレッツシユな春の柄 大樓
(五)新緑の岸へ口笛漕いで来る 浩笑子
(五)新緑のくつきりうつる洗面器 曉明
(人)新緑の古利禪の氣自から 蛇の唇
(地)検温器振れば青葉目にしみる 不競
(天)雨一日二日三日新緑の朝 南葉
靈子

雑川 天王寺支部會 (大阪)

二月二十五日

於天王寺支部クラブ 妹尾變人報

サーピス、覺悟、冗談、想ひ出、一、友

サーピスが好うて仲間にはらばき 粒子
手術する覺悟を母はにぶらして 同
サーピスの餅がブト出た公休日 よし美
日給は安くサーピスやかましく 同
サーピスが悪いなどは振られぬ 巨人
むづかしい顔に冗談言ひそびれ 同
ノーチツブちとサーピスへ角が立 ライト

池澤樂居

大阪府下高師濱

淺田一

東京市世田谷區代田一ノ六二五

前田五健

松山市真砂町二一

米本貴志子

池田可宵

朝鮮仁川府宮町

大島濤明

大連市西公園町川柳居平洞
自宅電話三七一三番

川誌柳岡町支部

藤井ひろみ 馬越花蝶
柳田英月 今井美鳥
矢杉愁花 松永幸葉
中田落葉 松倉白猿
小谷清緒 野本吞水
大西伊佐 毛利稔幸
矢杉雪春 坂内春椿
宮口芳醉 竹中内坊
辻紅多呂 田本風葉
田中楠美 呂本水客
中西柳陽 柳美呂本
多田一柳波 幹事丸尾潮花

川・雜

松枝靜波 山下秀峰 仙波夕人 酒井斗風 皆見一男 田邊由布 增元翠陽 天野卜居 水谷鮎美

光輝ある記念號發刊に當り
川雜支部開設の榮を賜はる
諸先生諸兄弟の御聲援を乞ふ
(順不順)

川・雜

下關支部

中村九呂平 安田余志雄 中野水川 小畑柳星 和氣山尾 大塩一哲 森津流角 石崎勇幸 岩弘半休 國弘不樓 櫻川市他樓 多田市他樓
事務所、下關市西大坪町六九〇

鳥山一步

西宮市外甲風園
住宅地第三號地七五

橋本綠雨

大阪市住吉區平野西之町八三

福田山雨樓

橫濱市保土ヶ谷區
保土ヶ谷町三三三

西田艸樂

大阪市東區元伊勢町昭和園
經營 日の出化學研究所

奥村丹路

山本雨迷

大阪府下濱寺町大字下石津

龜井晟修

函館市青柳町三七

大坂形水

大阪府高師濱

中西おさむ

大阪府東成區北
生野町一ノ二八

森立名

大阪府三島郡吹田町
字萬畑一四一六

森森 東魚
はのほ

田中五扇子

大阪市此花區西
九條上通一ノ六五

由利孝輔

愛媛縣大洲町

公立社書店
藤堂卓

大阪市南區日本橋南詰入
電話 南五六二番

庄万よし

南區難波新地二番丁二七

<p>川柳翻譯研究會</p> <p>阿部佐保蘭</p> <p>東京市小石川區初音町四 電話小石川四八四一番</p>	<p>石崎柳石</p> <p>今治市城山通</p>	<p>富士野鞍馬</p> <p>東京市麴町區五番町七</p>	<p>小林不浪人</p> <p>青森市浦町橋本二八三</p>	<p>長崎柳秀</p> <p>阪神沿線御影町字榎本</p>	<p>村田周魚</p> <p>東京市豊島區高田 本町二丁目一四六七</p>
<p>市場没食子</p> <p>市内中川町三〇二地但シ今 里新地公園東筋南へ一丁半 西側大衆喫茶さくら</p>	<p>須崎豆秋</p> <p>住吉區旭町二丁目一四</p>	<p>姫田夕鐘</p> <p>大阪市大正區小林町三六</p>	<p>朝田新水</p> <p>大阪市外三郷町西橋波五六九 電話守口二五五番</p>	<p>永田里十九</p> <p>大阪市南區堂屋町六番地</p>	<p>高橋かほる</p> <p>大阪市南區北炭屋町六番地 電話五九六番</p>
<p>大橋素月</p> <p>大阪市住吉區田邊 東ノ町八丁目二四ノ一</p>	<p>富本無煙</p>	<p>谷心府</p> <p>今治市米屋町 伊豫相互貯蓄銀行支店</p>	<p>渡邊曉童</p> <p>今治市寺町一三九</p>	<p>酒井大樓</p> <p>川柳雜誌社松山支部 松山市松前町二丁目</p>	<p>大西八歩</p> <p>大阪市東區博愛町一ノ一八 竹中方 電船場一七三一番</p>
<p>尼綠之助</p> <p>島根縣簸川郡高松村</p>	<p>松盛琴人</p>	<p>櫻井圓角</p> <p>大阪市東區兩替町松屋町 電話東五三一二番</p>	<p>中見光路</p> <p>大阪市西成區 粉濱西之町三ノ三</p>	<p>關本雅幽</p> <p>大阪市住吉區 田邊本町七ノ三二</p>	<p>吉川啞人</p> <p>山口縣久賀町</p>
<p>畑田よ江</p> <p>大阪市浪速區惠美須町 二丁目一五〇番地</p>	<p>石田沐天</p> <p>大阪市西區阿波座 下通一ノ三二</p>	<p>小西無鬼</p> <p>兵庫縣多紀郡篠山町小川町</p>	<p>福田鶴峰</p> <p>大阪市住吉區平野西之町七</p>	<p>谷村稔</p> <p>大阪市東淀川區國次町五二</p>	<p>楊井二南</p> <p>神戸市神戶區 中山手通七ノ一七七</p>

古寺謙南坊 大阪市北區黑崎町十九	飯尾寄與史 尼崎市大物町三ノ四一五 潮方	酒井美知夫 兵庫縣川邊郡稻荷村南野	杉本毬夫 尼崎市難波新町一ノ二二一	山田南濃路 尼崎市難波新町一ノ二五七	嶋田翠峯 大和龍田町五百井
矢野虻の磨 松山市南柳井町五九	高峰柳兒 長野縣須坂町	櫻川不水	渡邊からす	沼波智美 大阪市東區空堀町四五	弘津慶一 朝鮮全北金堤本町

阪大川柳會

大阪帝國大學醫學部内

社誌雜柳川
部支町鶴

宮宮照松上高米加岩
岡岡屋山下山橋谷藤橋
公白寬小よし房太イ双
子峯柳子み子樓ト虎

社誌雜柳川
部支寺王天

榭尾妹松神石中山和富澤
野花尾原村川川久岡田
定信變岳木九南富双巨粒
子子人峯綿久鳥士葉人子

戸 倉 誠 司
(普 天)

兵庫縣川邊郡川西町鶴ノ莊

森 井 荷 十

東京市下谷區坂本町一丁目六番地三號

雜川 誌社 柳 御池橋支部

村 松 夢 裡
大阪住吉區住吉町一七二七
後 藤 青 兒
大阪市東成區生野ヶ丘
西 い わ を
大阪市東成區南生野町二ノ六二

雜川 誌社 柳 廣島支部

廣島市霞町三〇五番ノ八

川柳雜誌社西條支部
荒 井 英 賀 夫

愛媛縣西條町本通

草 薙 川 柳 社

名古屋市中川區八熊町寺田二五〇

吉 田 水 車

名古屋市中種區田代町堀割七八番地

有 恒 川 柳 會

大阪備後町二野村ビル 有恒俱樂部内

松 坂 俱 樂 部 川 柳 講 座

大阪日本橋筋三・松坂屋百貨店

弊誌創刊十五周年に際し各位の深甚なる御同情と御支援に對し厚く御禮申上ます

川 柳 雜 誌 社

編輯部・營業部 一同

全 國 便 箋 發 賣 元

岡 本 ノ ー ト 社

にきびとりに

美^び顏^が水^す



美容薬として

ニキビ吹出物に非常によく効きますので大評判の薬です。ぜひお励めしたい薬！

この薬は美容薬としても大へんよく入浴後や洗面後等にお用ひになるとても爽快で、ニキビ吹出物を防ぐのは勿論、キメが細かにツヤを増しお顔がスツキリと美しくなるので美容薬としても盛んに愛用せられてゐます。

蚤蚊南京虫其他毒虫でカユイ時にもとても便利な薬！

ニキビ

此	に	吹
薬	ぜ	出
を	ひ	物

化粧用 美顏水

最	粧	の	アブラ顏
適	下	お	
!	に	化	